





3131  
2

鳥田藏書

鳥田

北越雪譜初編卷之中

目錄

- 雪類人小災雪類人小災・次第下次第下
- 玉山翁玉山翁の雪の圖
- 縮の種類縮の種類
- 綾綸綾綸
- 織婦織婦の發狂發狂
- 御機屋御機屋の靈威靈威
- 菱山菱山の奇事奇事
- 狐火狐火
- 雁雁の代見立代見立
- 寺寺の雪類雪類
- 越後縮越後縮
- 縮の紵縮の紵並紵績並紵績
- 織婦織婦
- 御機屋御機屋
- 縮を雨縮を雨並縮並縮の市の市
- 雪中花水祝雪中花水祝い
- 秋山秋山の古風古風
- 狐狐を捕捕る
- 天天の網網

雪譜初編卷之中 目 文英堂藏



雁の總立

通計二十四條

法海川ぎの涉り

北越雪譜初編卷之中



越後塩澤

鈴木牧之 編撰

江戸

京山人面樹 刑定

○雪類人小災屯

吾任魚沼郡の内にて雪類の為小非命の死をうける事其村の人の事を  
 して小記をある事ども人の不祥ある事人名を詳ふせば○こゝ何村との小形の家  
 内の上下十人あまりの農人あり主人ハ五十歳をり妻ハ四十小く世息ハ二  
 十あまり娘ハ十八と十五とつとも孝子の聞ありけり一年二月のそとめ主  
 人ハ朝より用ある所(出行)其日ハ已小申の頃あると飯りきこるばまの間に  
 くるべき用もあつてけりけり家内不審ありハ悴家僕をつきて其家ふりてり  
 父が事をたづねふてハきこるべしとけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
 そよりて尋求しつと更小音問をきこる日もそや暮るんとを言ハ空しく家小飯



りあつたのよう母小語りけきば心得ぬるこころ心あつたの処かこころ人を走  
 らせて尋させけふふその在家さうふあきば其夜四更の頃ふいふこころ主人の飯  
 らば此事近隣小聞えて人々集り種々小評談して居るをり一も一老夫来り  
 てりあつたあつたのええぬねとや我心あつたりのあつたあつたせやさんとて来  
 たりとのふまへてあつたとき主人の妻大いよろこび子どのらまこむぐ小  
 言語をそらへてまぐれをのこその仔細をこころ秘けきば老夫いふやうなこころ今朝  
 西山の嶺半ふきかへらんとせし時このあつた小行途何方とてあつたけきば稻倉村  
 行とて行過ぬぬ我の宿飯り足あて遙小行過る頃例の雪類の音をききてこころ  
 うらぶらの山あんと嶺を无事小通りをよろこびふつけまのあつたふいふとを  
 無難小行過ぬぬや万一さうさう小逢はぬさうさうと案づつ宿へつらぬ今ふ飯  
 りぬぬぬぬやあつたあつたのこころ眉を皺めけきば親子の心あつたのこころたのこ  
 ころも案ふさうひて顔見あつた涙さうさうと老夫いふとをえとてこころ小

立之りぬ集居る若人どもこころをききてさうさうの処ふいふたつてこころ  
 炬こころよとど立膝きけきばひらの老人がひらひらまぐまぐ遠くたつ  
 福小行一者もいふまごかへば今もその人とかあつたあつたの飯りなさん  
 えりりぐ一雪類ふいふさうさうのふいふあつたあつたをかの老奴がけきば  
 こころをいひて親子の心を苦さうさうのこころ親子のこころ小励まきこころ心慰酒肴を  
 いづて人々ふまへてこころをえて皆打多つて炉辺小座列て酒酌さうさうや時うり  
 て遠く走さる者ども立うり一小行方の猶志まきりりり○かくて夜も明けきば  
 村の者どもいさうの聞一やどの人々此家小群り来り此上ハとて手ふく木鋤  
 を持家内の人々も後ふまへていひかの老夫がひつらるこころの処小至りけりまて  
 雪類をふるふさのこころぬぬぬぬのぬぬぬぬ道を塞さるる二十間餘り  
 雪の土手ををせりしやこころ小死しりともさうさうの下をさうさうこころ小死しりとも  
 りひまばいしやせんといふ人々佇立するさうさうかの老人よりこころ所為とてあつたとて若



き者どもをつま近き村にいりて雞をかりあつり雪類の上ふそち餌をあえつ  
 かの小処(あむませけ)ふ一羽の雞羽さき一々時あふぬふ為晨けきバ餘のふとりも  
 小あつまりて声をあせけりて水中の死骸をいともむ衝るるを雪小用ひ一ハ應  
 寢の才一このちくまども人いひあつり老人衆小むいあふらるるに此下小在  
 へ一いぎ掘とらんそ大勢一度小立かりて雪類を碎きりて掘けりやど小大  
 穴をりて六七尺まわり入る一が目小ふゆものささふら一掘ちりてををる一  
 けし小真白の雪のあふ血を深る雪小かりあえまらやとと猶わり入る一小片  
 腕ちぎとて首あき死骸をりりて一や腕いれどまども首いれどむせりふとて  
 廣く穴小まらるるをあちこちわりゆとあてやうく首もいれり雪中小あり一  
 ゆ多面生るぐとくさきせんよりく小ありつ一妻子らこまをるより妻ハ夫が  
 首を抱(子)どもハ死骸小とりまがり声をあげて哭けり人ともこのあはさまをる袖  
 をわくまらるりけりかくてもあはさまは妻ハ着る羽織小夫の首をつとて

かく世息ハ布子を脱て父の死骸小腕ををく涙をうふつ一資負んとする時さ  
 せん走りする者ども戸板むらうらど擔げり用意なる一まきり妻がめらるる首をも  
 むきうふとくかさげりまらるる前後ふつきまひつま子らハ哭くあふつきく飯り  
 けるとど此のどりのハ牧之が若り一時その事小あづりする人のかこり一まをある  
 せりこのまらるるびるまふ命をうらるひ一人猶多りまらるるまふ家をわ  
 つまらるるまらるる其怖さのりんくう一かの死骸の頭と腕の断離するまらるる  
 うつて磨断する

○寺の雪類

ありて敢て山ゆもるまらるる形状峯をり一う処ハ時とてるまらるるりわり文化の  
 とも思川村天昌寺の住職執中和尚ハ牧之が伯父ハ仲冬のを多此人居間の二階  
 める書案ふよりて物を書てをくまらるる窓の庇下りする垂氷の五六尺まらるる明りふ  
 障りて机のわり暗さゆ家家の擔ふりて家僕ハ雪をわんとてららるる木鋤を





京水集



農夫頓智借雜圖

國語卷之四

文海堂雜



たりかのうらを打をんとて一打うちける此ひきやありけん  
里言つらをうらを  
 本堂不積る雪の片屋根存くともさち土蔵のやとり不清水がりの池あり  
のたつひと古言も  
 小和尚のまゝ小押落さじ池小入るまをささの勢ひ小身ハ手翰のごとく池をも  
てま  
 ともてえて掘揚る雪小半身を埋めるとあたまけびると多小庫裏の雪をやり  
を  
 ぬるあめづら馳きてり持る木鋤わく和尚を掘いさけまば和尚大笑ひ身をも  
を  
 をんろ小聊も癒うけは耳小掛る目鏡さつとなく不思議の命をまよりぬひぬ  
此  
 此時七十余の老僧く前小り何村の人の不幸小比は万死小一生をえんと  
天  
 天幸といひつる一齡も八十余まで元病小く文政のまゝ不遷化せまき平日余  
示  
 示してしるす一我雪顔小撞きと死筆を採りて居り一尊き佛經あり  
ゆ  
 ゆゑたゞゆはハ一字毎小念佛やて書居りあり小雪顔小死をり一を不思議  
小  
 小命助りり一字念佛の功德やありけんささ人ハ常小神佛を信心し  
悪  
 悪事災難を免とん子をいのる一神佛を信む心の中より悪心ハいぬもの

悪心の无が災難をのり第一ことをへらまき今も猶耳小残より人智を尽して  
の  
 のらさうさ大難小あハ因果のまゝあむる処らん人ハさうりありて  
人  
 人家の雪顔小家を潰せ一軍人の死するどあま見聞さすともさの  
と  
 とてあるさげ

○玉山翁が雪の圖

されのと一玉山翁が梓行せし軍物語の画本の中小越後の雪中小た  
う  
 うひと一圖あり文ハ深雪とありてあるも十二月のりある小を記する軍兵  
と  
 とのが奉止をる小雪ハ浅く見ゆ 越後の雪中馬足ハ 由小農人を雪中  
あ  
 あつるハ作者のあやうりてあつる画者も語る 牛馬を用ひむ 軍馬を乗る馬上の戦ひ  
雪  
 雪あさ死国の人の画作さす雪の实地をあらわす 越後 越後雪中の真景小甚く  
か  
 かつりある一画ハ虚もまじりてさぬあ死もあえげまどあまり小た  
が  
 がひとまば玉山の玉小瑾あらんも惜けまばかめて書通の交り小まらせく牧之が拙き  
筆  
 筆めて雪の真景種々寫し一猶常小なる真景もがくと春の半まじり 三国



嶺ふちうた法師嶺のふとふ在る温泉ふ旅りそのあつりの雪を見つるふ高は  
 峯よりあつりふるふ雪の長さは五七間やとある四角或は三角なる雪の長さ八三三  
 間もあつるとかふふ谷ふととつりふる上ふふや幾つとつり大小とつりふるなど  
 雪国ふらまきてる目ふふとつりその奇観ことづつるがてつりその真景をも其座  
 ふうりふらふるを添て贈りふ玉山翁が返書ふ北越の雪我が机上ふふりかふ  
 がおとく目をかこつりふらふとつりその圖をうか多くあつり文を添さを私筆ふら  
 例の繪本とつりふらふ其書雪の霏ふとつり諸国ふ降さるる我が筆下ふ  
 在りといふとつり書翰今猶牧之が書笈ふをさめあり此書ふらふらふとつり黄なる泉  
 小玉山を沈ふ惜ふらふ

○越後縮 ちごの文字普通の俗用ふをふ又ちごとい訓ふを

縮ハ越後の名産ふとつり普く世の知る処ふと他国の人ハ越後一国の産物と  
 かふふとつりふらふ我住魚沼郡一郡ふらふる産物ハ他所ふ出るもあふと

僅中一其品魚沼ふ比ふとつり縮と唱ふは近來のふてむらハ  
 此国ふも布とのふらふ布ハ紵中織る物の総名ふらふらふ今も我が  
 たりゆら老女らと今日布を市ふてあけらとつりふらふ古言ふのふらふ東  
 鑑を崇ふ建久三士子の年勅使飯落の時鎌倉殿より餞別のふをらふ條  
 小越布千端とあり猶古記のふもふらふけとつりふらふ索む後のものふらふ室  
 町殿の營中のふらふを記録せとつり伊勢家の書ふは越後布とつりふらふ  
 と見えたりとつり縮ハ此国の名産ふらふらふあふらふけ一愚案ふむ  
 りの越後布ハ布の上品なる物なりとつり後々次第ふ工を添て糸ふ縷をつよ  
 くわけけ汗を凌ぐ為ふ縷せ織るふらふもふらふ縷布といふふらふをふらふ  
 ことのふらふん欵かくて年歴るやふらふ猶工ふらふ地を美しくせんといふ今  
 ちふらふ名のふらふ残りふらふ我が推りふらふ時ふらふいふらふふらふ今ふら  
 の模様を織るふらふ錦をむらふ機作ふらふをふらふふらふらふらふらふらふらふらふ



様をもり縞も飛白も甚上手ふり種々の奇工をいそり機織婦人  
らの伶俐ありさ故ぞ

○縮の種類

魚沼郡の内由々縮をいそ事一様あり冷村よりて出毛品ありあり  
自らむりより其品小の熟練と他の品小移らざるゆゑと其所その品を  
産せ事左のごと

▲白縮八堀の内町在の村こまを堀の内又浦佐組小出嶋組の村

▲模様ある或ハ飛白りゆる藍錆とハ六塩澤組の村

▲藍緞ハ六日町組の村 ▲紅桔梗縞のるハ小千谷組の村

▲浅黄緞のるハ十日町組の村又緞の弁慶縞ハ高柳郷ハかぎさう右

のづまも魚沼一郡の村と此餘ちをいそ所二三村ありと専らふせざる

あはれく舎てあるさび縮ハ右村里の婦女ら雪中小籠り居る間の手業

おとそハ来年賣べきちをいそ十月より糸をうとせり次ハ二月  
うらふ小晒さきをいそ白縮ハうらえける所ハかりやせやうとせり人ハ文あるものやど  
あはれいそさども手練ハよくあるもの之村ハの婦女らちとせり丹精を尽  
をりあはれ小冊ハ尽しとせり其あはれを下し記せり

○紵

縮小用ゆる紵ハ奥ハ會津出羽最上の産を用ふ白縮ハもを會津を用ふ  
あはれづく影紵といふもの極品とせり米澤の撰紵と称するも上品之越後の  
紵商人の国よりいそて紵をいそめて国小賣る紵を此国也とせり  
古言ハ麻を古言ふとといひハ綜麻のるハ麻も紵も字美ハあはれく布小  
織べき料の糸をいそて紵をいそ作る也と字書ハえり

○紵績

余一年江戸小旅宿せり頃或人のいそ縮小用ゆる紵を績あはれその処の婦



人誘ひあつて一家小あつたりその家ゆく用ふる紵を績て此人たがひ小その  
 家をめぐりて績と聞しうらやういひきしうる人どかき空言をばいひあうけん  
 まりうらう魚沼一郡も廣きうや右やうふまる処もあやうんよひありともこ  
 下品のちびも小用ふる紵のちびも下品の縮のちび姑舎て論ぜば中品以上小用  
 あるを績ゆらうむ所の座をきまめあき体を正しくう呼吸小つて手を動せ  
 て為作をるも定座小居る假小居て其為作をるせむのづう心鎮むし  
 糸小太細のききて用ふならう常並の人の紵を績ゆ唾液を用ふるし  
 ちびの紵績ゆ茶碗やうの物小水をすうひくことをのち事毎小鹽ハ座を  
 清めてこそをるせあり

○ 綾綸

糸小作るゆも座を定め体を圍位るゆ績ふある綾綸その道具その手術  
 その次第の順その名小呼物許多種あり繁細の事を詳ふせんハ  
 けま言ほどをもくうもむよりわりをるまでの手作をて雪中小在  
 上品小用ふる処の毛よりも細き糸を經兆舒疾てあうる雪中小籠り居る  
 天然の湿氣を得まは為難湿氣を失ハ糸折るゆありをきしとこ  
 力より断るゆあり是故小上品の糸をあつる所ハ強き火氣を近付む時より  
 より織る小後て二月の半小ゆり暖氣を得て雪中の湿氣薄き時ハ大る鉢やう  
 の物小雪を盛て機の前小置ての湿氣をかりて織るゆもありこまのゆり小付  
 て熟思小績を織ゆ蚕の絲ゆ多陽熱を好布を織ゆ麻の糸ゆ多陰冷を好む  
 さへ績ハ寒小用ひ温あうゆ布ハ暑小用て冷うあうゆ是ハ天然小陰陽の  
 氣運小屬する所らんゆ件ノ如く雪中小糸とる雪中小織り雪水小洒き  
 雪上小晒も雪ありて縮ありさま越後縮ハ雪と人と氣力相半しと名産の  
 名あり魚沼郡の雪ハ縮の親とゆ蓋薄雪の地小布の名産あるは  
 ハ糸の作り小よるゆ越後縮小比て知る也



○織婦

凡織物を専業とする所ある織人を抱へて織物を利とて縮ふ所の  
 別小无き国の名産の織婦を抱へて居る家ありあはれいと  
 ろま縮を一端の縮むるまで小人の手を勞するなりとて  
 小賃錢を當て算量するありあはれ雪中小簞居婦女等が手を空くせざるのこ  
 の活業之縮の糸四十縷を一升とのみ上とのちの糸二十升より二十三升ゆも  
 至る但一箴ゆ二をちの通もゆ多一升の糸八十縷之布幅四方小緯糸もこ  
 小随ふく併さる地をるさばとて糸の縮多うんさる僅小一尺あまりを織る小  
 も九百二十度手を動するを以て一端を二丈七尺とて二万四千四百八十四  
 度手ををててうせさる端をるさば是は其凡をいふのを定尺とす  
 績も一むより織あり一晒しあげて端の縮むるまで其苦心勞歎ありひをるべ  
 ちどののちゆらぎる織物ハをて然るんが目前小我が視ところさるは

之か縮を僅の價にて自在小着用する俗小の安いの縮をある所の  
 娶をえらぶも縮の伎を第一とて容儀ハ次とてこのち小親するものハ娘の  
 幼より此伎を手習するを第一とて十二三歳より太布をかりあはれを十  
 五六より二十四五歳までの女氣力盛る頃小あはれ上品の縮ハ機工を好  
 せば老小臨でハ綺画小光澤ありて品價を高くて也 貴重の尊用ハさ  
 之極品の誂物ハ其品小能熟する上手をえらび何方の誰かと指小をさ  
 るゆ多そのかむ小いゆとて各々伎を勵むる之か辛苦ハ僅の價の  
 為小他人小まる辛苦ハ唐の秦韜玉々村女の詩小最恨ハ羊々金線を壓  
 て他人の為小嫁の衣裳を作るといひハ宜る哉

○織婦の羨狂

ひとせある村の娘をてて上とのちををあつてはらるゆ多大小よりて金  
 を論せびてて小手際をてて名をててとて績をててより人の







手をかゝむ丹精の日敷を歴て又る小織ありしをききしやより母が持きたり  
 ときと娘は中々見なく物をあけけをもちあひひたすまばいふし  
 女やどる煤いろの暈あるを三々母きぬいせせんやと縮を頼ふあて  
 哭倒まけるがごとより鼓狂とありさあぐの浪言をのありて家内を狂ひする  
 を又く両親娘が丹精しる心の内をおひかりて哭ひるけけり見る人もあはれり  
 てさる袖をぬくけりてとぞ友人あふがけりてのがせり

○御機屋

貴重専用の縮をあるゆ家の辺りふつり雪をもその心へ握まへ住居  
 の内ゆゑるさけ烟のいぬ明りもよき一間をよしく清めあてしき庭を  
 ちたるるべ四方小注連をひきこころその中央小機を建る是を御機屋と唱へ  
 て神の在りごとく衆尊ひ織人の外他人を入さす織女ハ別火を食し御機  
 にかゝる時ハ衣服をあはれ塩垢離をとり鹽漱きこころ身を清む日毎

小かくのごとく紅潮をいむるハ勿論之他の娘らをも今日誰との御機屋  
 を拜ふまのるるやうふいれ至極上手の女ふあはれ此かそを建るゆ  
 かけまバ他の婦女らごまを羨す比喩ハ階下ふありて昇殿の位をさる  
 かくご

○御機屋の靈威

神ハ敬ふふよりて威をままら宜る哉りその物も守りて敬ひ信  
 むまは靈あり空しく人のおきをて草鞋が衆人の信ぜしふより  
 てのちハ草鞋天王とて祭りし事五雜組ふんをりまてや神とあは  
 を敬ハ靈威ある冥々の天道ハ人の知を以てをりあまらばてふ或村の娘  
 例の御まらふありて心を澄しあををかり居たりし傍の窓をわと  
 くとき音あふのあり心ふまるとかかあはれ立よりてひきまふふをこ  
 心を通る男をりし人目の闇もかりし心うとくあををわ



家の後ふけり窓のゆゑに立る男を將て木小屋に入ぬや娘の母故り  
 來りかきやふ娘のをぬをえりけりあきりふその名をよびけり  
 木小屋ふきつげん遠驚に男ハ逃奔り娘ハ心顛倒し七身を穢るも打た  
 ちてやふけりけりそのまゝ御機ふより織んとあけふ倏急仰ふ倒し  
 落血を吐て絶入けり母此状態を見て大ふかどら紅さうやより助け起し  
 まづ御をまよりけりさあぐふけりけりけり氣息あるのまゝ死し  
 ごとく父ハ同村のふがが家小在をよびく一医をまねて薬を  
 つけそのあももろく両親いさくあよりよりをせよりのども娘の倒  
 小在てあももろく手を束て死を俟のまゝあうふひりの男來りさ  
 恥らふさあゆり人の後小座一欲言とていつげ頭を低て涙をかきけり人  
 こそをまねて同村の某が次男けり此男やえ膝をまめ娘の母小對ひ声を  
 ひそめりけりやう今いふをうつしやせん我ハ娘御と二世の約束をま

ものこころのやど人なきをえりむきめを誘ひいけしふかん身のうりぬひ  
 て多ふかき色も逃しりけりむきめごがけり災ありくと聞きつら思ふ  
 穢る身をまきて良きかん穢ふかりぬひる御罰あるこそよと我  
 する罪ある人いさげとも余処目ふえんハせらむそろく命をうけり契  
 するてふもあももろくむきめごの命ふ代りて神小御罰を説りん  
 ことよ死証人あるといひつ赤裸ふりて髪をもさな井のゆゑにふを  
 あくふ水を浴雪の上小蹲居るふやん唱つてけりけり時にも寒氣肌  
 を貫くをりふりて凍も死まきありさぬふもやいさく人をもてめ  
 せしこと知り實あももろく水を浴ぐけりけり神明の男  
 實心を憐れん人のものを納受すくけんくの娘目の覚るることく  
 あがり母をよびけりけり痕奇異のかひをさすむきめの倒あつたりけり









十四

雪の風景



雪の中  
晒縮圖  
皆雪の上

○医師  
雪舟  
病家

雪譜卷之中

雪舟堂藏



おもあき一夜灰汁あけ小浸ひた一お泥明あけの朝幾度も水みづ洗あらいひ絞しぼりあげてまのどく  
 きんをこ 貴重きんじゆう専用の縮ちぢみをさうけいこまきこくせ別べつふさ  
 場ばをゆけようぐふ心こころを用ひくささるや御機ごきをさるふ同おなく我國わがくにあは  
 地中ちちゆうの水気すゐき雪ゆきのふふ発動はつどうさるや雪中ゆきちゆうあつ雨あめもまら春はるいこまきこくせ  
 件けんのどくく日ひふささる晴はるのつ々事ことありまて灰汁あけふひくさるさるや毎日まいにち  
 かまらるるをりて幾日いくにちを歴かて白しろくをりてさるのちさるさるの中ちゆうささるさる  
 らんとさる白しろちぢみちぢみをささるけをりく朝日あさひのありくと昇あがりて玉屑たまご平上へいじやうふ列り  
 水晶すいしゆう白布はくふ小紅映せうえいく景色けいしきのふたさるさる光景あかりハ雪ゆきふまらるる暖国だんこく  
 の風雅ふうが人ひとふつさるくぞあつ凡おほちぢみちぢみを晒ひあ種しゆくの好この為ためあまらるるゆ其  
 大畧たいろくをさるけの

○縮の市

市場いちばとてちぢみの市いちあまらるる堀の内ほりのうち十日町じふにちのまち小千谷せぢや塩澤しよざいの四子所よっしよと

初市はついちを里言りげんふささるあれたとの雪ゆきとひの簾せきの明あけをひ四月しがつのちどめふ有あり  
 堀ほりの内うちよりさるむ次つぎふ小千谷せぢや次つぎふ十日町じふにちのまち次つぎふ塩澤しよざいいづまも三日みかづ間まを置お  
 てあり一定いぢぢさる右みぎ四よヶ所ところの外ほかあ市場いちばさる十日町じふにちのまちあ三都さんと呉服きふく問屋もんやの定ぢぢ  
 宿しゆくあり縮ちぢみをさる小買こかい市いち日ひあ遠近えんぢんの村むらより男女おとこをいれ所持しよぢのちぢみふ名な  
 所しよを記ぢぢさる紙し簽せんをつけく市場いちばふ持ぢぢよりその品しよを買かひ入いふふせく賣う買かいの直ぢぢ  
 段だん定ぢぢさる鑑かん符ふをさるさるその日ひ市いちをさる金かね換かふさる半年はんねんあまらる縮ちぢみのり  
 小辛せうしん苦くさる此こゝ初市はついちの為ためさる縮ちぢみ賣う入いさるこふ那なるもの人の濤うをさるこ  
 せ足せあしを踏ふみさる肩かたを磨こる万まんの品しよもさる小店せうてんをさる人物にぶつを賣うる遠とほく来きりさ  
 りの八宿はつしゆくをゆもむもあまらる家いえ毎まい人ひとつぢい香臭かうきゆう師しの看物かんぶつ藥賣やくばいの弁舌べんぜつ人ひと  
 の足をさるめく錐こしをさるさる取とりもあつぬさる此こゝ初市はついちの日ひあ盤ばん花はなの地ぢの桑饒そうじやう  
 あもをさる劣あつ右みぎ小千谷せぢやの市いちをさるさるのちも在あり毎日まいにち向屋むかうや来きりさるさる  
 十七日じふしちにちより翌年あつねの初市はついち縮ちぢみの精疎しゆくの位ゐを一番いちばん二番にばんとひ價あひの高下たうげもさる定ぢぢ  
 まをさるさる縮ちぢみの精疎しゆくの位ゐを一番いちばん二番にばんとひ價あひの高下たうげもさる定ぢぢ







しるがまきしむまじりしけきるるるる

○雪中花水祝ひ

魚沼那の内宇賀地の郷堀の内鎮守宇賀地の神社八本社八幡宮之上古  
より立せぬとを縁起文多けりて省く靈驗ありてあるる八番く世ふある  
知りし神主宮氏の家小貞和文明の頃の記録今小存せり當王ハ文雅を好  
吟詠あり富り雅名を正樹との余も同好を以て交を修い幣下と唱う社家  
も諸方小あまきある大社之此神の氏子堀の内也娶をむえ又ハ婿をとりける  
ゆも神勅とて婿小水を賜ふことを花水祝ひといふ毎年正月十五日の神更之  
新婚ありつゝ家毎小神使をぬるる多門おき時ハ早朝よりして黄昏ふける  
時もあり友人嘿齋翁曰堀の内の人花水祝ひといふるハ淡路宮瑞井の井中ハ  
多邊花の落る祥ありしるの日本紀ふええるハ濫觴とて花水の号とふ  
起立ゆやとらふはたはたハ新婚の婿小神水を汲る當社の神祕とて

當日新替ありつゝ家小神使さるる人ハ百姓の内回家門地の輩神使を發せり  
家定めありその中ゆく服忌ハささく暮る者家内小病人ありの縁類ハ不祥  
ありしもの皆除くしるるも家内小故障多平安無事なる者を摺び神更の前  
の朝神主沐浴存戒存服をつけり本社小昇りえりびる人々の名を去り  
て御圖ふあげ神慮不任て神使とて神使小當りする人潔齋して役を勤む是  
を大夫との嘿齋翁曰くをあらりし淨行きて當日正月神使本社を出るその行  
装ハ先狭箱二本道具臺笠立傘弓二張薙刀神使侍烏帽子素襖次小太  
刀持長柄持傘さかから侍二人草履取跡鎗一本此品ハ神車小次小氏  
子の人々大勢麻上下ゆて隨ふか行装ゆく新替の家小いするゆ多その以  
前雪中の道を作り雪ゆ山とりのやうある所ハ雪を石壇の中うつり或は  
雪ゆく棧さきめく処を作りて見物のなるといふことさるるゆもあまき人の人夫を  
費さるるゆとてその家ゆへ家内をより清めりて其日正殿の間とさるる

十七 文海堂



一間八塩垢離ふきよめを神使しんしの席せきと一綵建さいけんを布ぬいの上座じやうざ小毛氈せうせんをまき上  
 段だんの間ま不表ふひょうり刀掛やぶかをわく次の間ま八親族しんぞくはきさく之これをさき人ひとより祝美しゆみのかうり物  
 をわくふかく嶋臺じまたいをふ賀が咏えいをさくさくおののさきめく之門かど中ちゆう幕まくをうちよたむを  
 の処ところをまかりあげてさく不猫脱ふねだつの壇だんをわたり去関式きやくしき臺たい小准せうじゆんふ家内けいだいのものりつとも衣服いふく  
 をあつさる神使しんしをまう神使しんしのさきりとりさくふをせきさくさく踏ふみ危あやり大声おほこゑゆて正位せいゐ三社宮さんしゃみやう  
 神使しんしをむふ神使しんしのさきりとりさくふをせきさくさく踏ふみ危あやり大声おほこゑゆて正位せいゐ三社宮さんしゃみやう  
 使者しやと大呼おほこゑ神使しんしを見て亭主ていしゆ地上ちじやう小平伏へいふく神使しんしを引ひてさの正殿せいだん小座せうざさくむ  
 行列ぎやうぎよう八家はけの左右さうぶ小ありて隊たいをさくさく神使しんしへ烟盒えんこく茶吸物ちやくぶつ膳部ぜんぶをいさく数献すうけん  
 をまむむあつさる壺か小盃さきをさくさく三方さんぱう肴さかをさくさく献酬けんじゆう七献しちけんをさくさく盃さきさくさく  
 祝美しゆみの小詣せうぎをさくさく事終じきゆうりて神使しんし本ほんさく他た小新姻しんいんありて家けありさく又また到いたりて式前しきまへ  
 のごとく此神使しんしはさの花水はなみづを賜たまふ事を神かみより氏子うぢこ告つめさく使つかひの使つかひの神使しんし社頭しゃとうへ故こ  
 立たりて個着こぢやくの神使しんし社内しゃないへ飯いりてをさくさく踊おどりの行列ぎやうぎようを繰くりて一番いちぱん小傘せうさん手錦てにしん

のさつひをさくけ旋まわり端はなは小鈴せうりゆうをつけ又裁はい物の物ものさめくさくをさくさく傘さん牙がの上うへ  
 小八諫鼓せうはつかんこを飾かることを持もつ二人ふたり紫むらさちりめんおて頬ほをつつてさくさくむきひささかた  
 紅絞べにぢをさくさく禪釋ぜんじやくふかき嘿が呑おん白はくをさくさく祭礼まつりぎ小用せうりゆうふ傘さん牙がとさく物ものハ古ふるハ  
 羽葆蓋うぼうがいの字じを訓おんり所謂しゆゑん織オリ小ことさくさく神輿かみこ鳳輦ほうげんを覆おほひ奉ほうりてさく錦蓋にしんがい之これ  
 とさくさく猶説なほせつありて長ながけさく省せうくさく二ふたさん小假面せうめんをあててさくさく鈿女せうにょ小扮せうぼんさる  
 者もの一人ひとり帚しゆうのさくさく紙かみ小女にょ阴いんをさくさく髪かみをさくさくつけくかてさく次つぎ小こさくさく假雨せうりゆ小  
 て猿田彦さるひこ小扮せうぼんさるもの一人ひとり麻あしあつ作りさる観帽くわんぼうやうの物を冠かむりり手杵てこのさ  
 きを赤あかくさく男根おとこん小表示せうひょうじさるをさくさく三さんさん小法服せうぷくを美うつくしくさくさくかきりたる  
 山伏やまぶし螺らをさくさく四よさん小児この警言けいごあつひく身みをさくさく随まりて次つぎ小こ大人おとなの警言けいご  
 固麻こま上下じやうじやう杖つゑを持もつ非常ひじやうをいさくさく五ごさん小踊おどり者もの大勢たいせい花はなやうさく浴衣ゆかり小正せい月げつ  
 人勢ひとせい小焚あひ色いろあつ細帯ほそおびをさくさく群行ぐんぎやう里言りごんふことをさくさくさくさくあつさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 象ぞうのさくさく皇孫すうそん日向ひなたの高千穂たかちほの峯たかね小天降あめふりりゆひ小縁せきの心こゝろさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく



花水祝浴水畧圖



堀の内驛花水祝ひ  
噪劇の図原本の  
草画を此小載て  
別小至細の圖と  
示さるものい  
梓刺の旁と  
省き在り

梅まきそまむと  
この布や雪も  
水を祓ひ

堀の内を  
山東庵京山



鈴木牧之画



翁おきなの摘と説せつあり一ひととさぶくさて壻むすこの方かたを此こゝをどり場ばをもどる人のまへり  
 まうけかきあてて一ひとの筵むしろをいれあてて一ひとの手桶てぶくろに水みづをくると松葉まつばと  
 昆布こんぶとを水引みづひきゆくむきひつけむらの上うへにおき銚子しやうし盃さきをさぐり水取みづととて  
 壻むすこの水みづをあぶる者もの二人ふたり副取ふたりのととふもの二人ふたりあぐなまきいさひで一ひとげふ  
 りてうむむらやうの細帯こまきゆてをどりのまき方をまづをどり家いへふちあけバ行列ぎやうぎやう  
 ひらき踊おどり人ひとあむらひのめづりあむらひうらうとつをさるその唱なま哥うたふ  
 「めでた〜の若松わかしほさぬハ枝えだも榮さかゆる葉はも茂さかるまんやめとこの花水はなみづこんやせあり  
 あびせん我日夫かせ夫のふ夫をりうら〜あやうぐをうえてうらひをさる事こと慣なる踊おどり  
 けいこの水みづとららもその程ほどを見みて壻むすこ三献さんけんを祝いわせうの手桶てぶくろの水みづを二人ふたりて  
 左右ひだりみぎより壻むすこの頭かぶへ滝たきのごとくあぶせかるとまを見みて衆人しゆじん并躍ならびにてめでた  
 と賀いわふむてハそのま〜日ひがりふせ入りいりをどりハ摘と家いへふちあ入りいりてをどりう  
 とふす七八遍しちぱんあてどろ〜と立たきり再またびさめめのごとく列ぎやうをさる〜他の

壻むすこの家いへふの事こと一ひととさぶくもをどりハ摘と役やくの家いへさといふとあるものいへ入い  
 りてをどりあり〜と田舎いんやハものを視みるゆま〜此日このひハ遠近とんじんの老若男女らうじやくなんにん  
 あまをいんとて儀ぎのごとくあつまりむら〜とて熱あつ衆しゆもさる筆ふで下くだふ  
 尽つ〜が〜〇按おんふ壻むすこ水みづを漢かん事ことハ男おとこの阳火やうかハ女にの阴いんの水みづをあて  
 て子こをあ〜むら〜の兇事きんじゆて妻つまの火かを番ばんと〜祝いわ事ことハ此事このこと室町殿むろまちの  
 頃武家むらたけの俗習ぞくじゆよりかてりて農商のうじやうも〜ふ倣なまひ〜中な行ゆき〜事こと物ものふ〜え  
 たり 貝原先生かいげんせんせいの歳時記さいじきハ松永しょうえい 江戸えどゆてハ宝永ほうえいの頃ころゆ〜世よ上かみ一ひと同どう正月しょうげつ十五日じふごにちの  
 事ことと〜祝いわ儀ぎの中なかふありて大おほ流なが行ゆき〜ゆ壻むすこ恨うらみある者もの事ことを水みづ取とハ  
 一ひととさぶく〜の狼籍ろうせきをさる人ひともさ〜ありて人の死し亡なふもさ〜ひ〜るま  
 あり〜ゆ壻むすこ正徳しょうとくの頃ころ国禁こくきんありて事こと絶た〜り〜ハむら〜物語ものがたりとゆ  
 りのふ見みえ〜 国初こくしゆ以来いらい未いまの事ことを記し〜る皆本みなほん元禄げんろく 件けんの花水はなみづ祝いわハ神祕しんひと有あハ  
 別わかふゆ多おほ〜もあ〜と雪ゆきのつゆふその大畧たいりやくを記し〜て好古こうこ家いへ

雪譜卷之中

二十

文海堂藏



の談柄小具するもの

○菱山の奇事

越後の頸城郡松の山一庄の総名ゆて許多の村落を併合する大庄といふも山間の村落ゆて一村の内といども平地なり一松代といふ所の平地も農家軒を連れ外百番の謠ふをえ一松山鏡といふ此地そのうへにあり鏡が池の古跡もそふあり今も池もあぬやうふ埋まるとその跡とくのみまより按る小松山かそのうへに鏡破の繪巻といふものを原とて作るなりん此多手記ゆも右の松の山の事見えてりさて松の山の庄内小菱山といふあり山の形三角なるゆゑの名あり一山ふちうに処小須川村川よりて 菅蒲村といふあり此ひ一山毎年二月ふ入り夜中ふかざりて雪顔あり其ひき一二里小聞ゆ傳てりゆ白髪白衣の老翁幣をもちてるるを乗り下るといふまに此るるに須川村の方二十町余の処真直小突下北年八豊作之富蒲村の方

斜小くは年八凶作之其驗少も違ふ事なり年の豊凶雪顔係る事此山小

の限るも一奇事といふべし

固より余が旧友出雲崎小住丸山氏の家祖父ハ博学の聞えあり一入ありき奈二十年前丸山氏の家小遊節をとりて時祖父が宝曆の頃の著述とて越後後名寄といふ書をつせしとて小三百巻自筆の寫本と名寄といふものと越後の風土記あり一国の神社佛閣名所旧跡山川地理人物国産薬品の類中てを部を分圖をいどて通曉しやとてある精撰と此書小右菱山の説も粗をえしとてさのそふとて引き菱山のつみをのふつとて此書の事をあひひらとて一がかる精撰大成の書も空一秘笈ありて世にあらざるが惜けはばあふりなり

○秋山の古風

信濃と越後の国境小秋山といふ処あり大秋山村といふを根えとて十五ヶ村をるる秋山といふと秋山の中央小中津川といふありて此多手記ゆも奥那妻前庄をの東



西小十五上村あり東の方小在る村ハ  
 ●三倉村人家 ●中の平村二 ●大赤澤村九 ●天酒村軒 ●小赤澤村八軒 ●中の原軒三  
 ●和山軒西小あり村 ●下結東村 ●逆巻村軒 ●上結東村九軒 ●前倉村軒 ●大秋山村  
 人家八軒あり此地根元の村あり相傳の武器を所持しりのもありりて天明卯年の凶年小代  
 倉の高嶺雲を凌て衆山とて小双ぶ清水川原に越後の入り口湯本ハ信濃小越の  
 嶮路ありの一夫是を守り六万卒も越え難き山間幽避の地と里俗の傳ハ此地ハ  
 大むり平家の人の隠る所といふ牧之謂り鎮守府將軍平の惟茂四代の后  
 胤奥山太郎の孫城の鬼九郎資国が嫡男城の太郎資長の代まで越後高田の辺  
 鳥坂山小城を構一國小威を震ひ謀叛の聞えありて鎌倉の討手佐木  
 三郎兵衛入道西念とて戦ひ終小落城せり此時貴族の落人るこの此  
 秋山小隱とてあんなり里俗の傳ハ平氏といふもよりあふ似たり此秋山

中古の風俗のつら残まりと聞ゆ多一度ハ尋むとあひ居り一ハ此地を  
 よりありたる案内者を得たりゆ多偶然あひこち案内者教ふまうせ朱味  
 噌醬油輕節茶蠟燭をす用意して徒者ふりせとて立いでハ文政  
 十一年九月八日の事なりたその月ハ秋山小近き見玉村の不動院小一宿次の日  
 桃源を尋ねる心地して秋山小ふらぬ入り口小清水川原とのありて  
 小いんとする道の傍小丸木の柱を建注連を引きて中央小高札ありゆ  
 なる事とて立よりて小童のうきてるやうのいろは文字ゆて「わがそのあつち  
 くののハハハハハハ」トあるせり案内曰秋山の人ハ疔瘡をおとる事  
 死をおとるが如しといふとるまはりてさうさうするものあまは我子といふも  
 家小居せせ山小假小屋を作りて入まむき喰物をそびヤハののまて  
 錢あるものハ里より山伏をこのそ祈らまもありきまは九人小て十人の死を  
 る此ゆ多小秋山の人他所ゆきさうさうありとてまは何事の用をも捨て



逃くふとさきば此地ゆへに宛瘡ある者甚と稀と十年ふ一人あるなりと語り  
 さて清水川原の村ふりてふ家二軒あり家居の作りさぬ他所ふりてあはれ  
 ふやとてひて立中ふてさきよりまづ猿飛橋を見玉とて案内の前立とて此  
 秋山の道はまづ所の人のたよりふきとて道の道ゆく牛馬ふさふはら  
 りる所さきとてさきふ道狭く小径さど深くしてやうく道をのりて所さき  
 ありかてての中津川の岸ふりてり岸の對ひ逆巻村ふりて所ふ橋あり猿  
 飛橋とのふ橋のさぬをさるふよりや猿ゆても翼あふさきとて飛ぶもあふ西岸ハ  
 絶壁ゆく屏風をさるさき如くさきとも岸より一丈あきり下ふ西岸よりさ  
 むらひさる岩の鼻ありてさきをさるりて橋を架くさきとて橋ある所下らん為ふ  
 橋をさるりてあり橋は直さる丸木を二本さるゆ細木を藤蔓ゆてあつけさるり  
 渡りハ二十間あきり橋の廣さハ三尺小くさき欄干ありとより作らば橋を渡りて  
 對ひの岸ふ藤綱を岸の大木ふら下げとありさきとて岸ふのむらとより

とてさきとてさき危けさき芭蕉の蝶も居直る笠の上とりひ木曾の棧中をさ  
 劣む此橋を渡るあやとりふ案内さき今身ハ此岸ふつきと東の村を  
 足玉ひと小赤倉村ふりて玉程さき道あつて小赤倉ふ知る人もあきと痛  
 をのりてさきとてさき橋をさるさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて  
 橋を寫しとてさきとて四辺をつらとてさき行雁峰を越て雪ふ字をさるさき猿橋をつ  
 とひく水ふ画を寫し奇樹崖ふ横さりて竜の眠るさき如く怪岩途を塞ぎと席  
 の卧ふふ儀より山林ハ遠く深く錦を布き碕水ハ深く激しく藍を流せり金  
 壁双び緑山連りさるさき画ゆもさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて  
 農夫二人さきさきかのく農を背負さるの橋をさるさきとてさきとてさきとて  
 さきとてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて  
 橋橋とてさきとて危きとてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて  
 うの藤綱ふさきとてさきとて岸ふのむらとてさきとてさきとてさきとてさきとて















へきりのゆらをいらいらふや草の形状を聞きりいふ多きとめぐり○秋山の  
 人いきて冬も着るまゝ中夜覺て夜具といふの事冬は終夜中火を  
 してその傍小眠る甚寒ふゆは他所より稿をゆゑ作りむきる衆小入りて  
 眠る妻あつものへまををひろく作りて夫婦つらまを寐る○秋山小夜具を持する  
 家ハ此翁の家とやふ一軒あるの事をきまうのいらいら織するふららのを布  
 子のまゝ大あつて宿り客のいふまゝの事とぞ牧之と一宿あり時此夜具小唄  
言ひあつてむきる衆小入りて  
世の所があつて身小を ○稿小とやきあ多鞋をまらば男女徒跣あて山小もまゝ  
へきりのあつて  
く ○人病あま六米の粥を喰せと薬とを重き山伏をむくくの事病をいの  
まらば源  
氏小もええ ○鏡を持する女秋山中小五人ありとぞ松山小の故事  
あつていふ事 ○此地の人まゝ  
とくろをん  
萬貫温厚小 人と争ふこととく色慾小薄く博奕をまらば酒屋けけ酒  
 のむ人まゝむりよりまゝ一まぢあてもねまをまらば人まゝといへり實小肉食の仙  
 境○かくて次の日やちの橋といふをまらば湯本小宿り温泉小浴り次の日

西の村くをえ上結東村小宿り猿飛橋をまらばその日見玉村小やどりて家小か  
 まりまめぐり記まきまらばまも文多けまのせむ秋山記行三巻を  
編りて家小蔵む ○朽の本字ハ  
 實の食方翁小聞りをま記りて山羊の心得と朽の實ハ八月熟りて落るをい  
 ろひ煮てのち乾り手小接てあまき篩小けて法皮をまら筆小布をまきて粉小  
 まらるをまきまらる水をうらてあまきまらる布小つら水小ひまらる  
 四五日小くまらるゆりて絞りて水をまらて乾らあづその白き事雪のごとく是を  
 栗稗あままらば又ハ朽まらるも食とま又餅ゆまらる別種ありとま 楮の實も喰  
 らそのまらる朽小似まらる○此秋山小るる山村他国小もあるよりを聞  
 くとま珍あつまらる福とまらるくまらるゆまらる記せり○秋山の産物木鉢まげ物  
 るの山をまらまげ繩板るの秋山小良材多らるとも村中をまらる中津川屈曲  
 深き所浅き所ありて筏をまらるく又ハ牛馬をつらまらる良材を出らるく  
 財をまらる事難けまらる天然の食地



秋山絶壁の圖



同猿飛橋の圖



牧之画

畧小入り之寐園



京水筆

雪堂の圖









狐火ハ玉のひるふもあはれり一狐の玉との物の光ると常ふも狐火とを  
別るべし

○狐を捕る

友人曰我が親しき者隣村一夜話小往る飯を途の傍小茶鐘ありしが頃  
も夏の夕べの多農業者の人の置忘るるものも腹悪きもの拾  
ひ隠さん持飯りて主を尋ねると鐘を手にさげて二町をうりあやまると  
重く有り鐘の内小声ありて我をひきつゝ連行せしめ小膽を消し鐘を  
逃さりし狐前ふり草の中へ入りしり二ふり一時の戯れ  
アアアア妖魅の術ありあつて人小欺きて捕らるる如何余答ては鏡炮を以  
てまゝ論る番餌を以てまゝはる人の欺くを知りて怒を捨て慎むるあ  
つたをまゝ知りあつてまゝを喰ひて反て人をあざむくんとて捕らるる  
こそ邪智ありきやあはれ豈狐のまゝんや人も又是ふ似たり邪智ありしもの悪  
とありあつてかく為人のあつたこと己が邪智をたのめ終つて身を亡るは  
怒も賊怒も怒はれども身を亡る番餌之至善人の路小千金を視室小美人と  
對して心安小動さる止ることを知りて定るるあはれかた人の胸小明  
鏡ありて善悪を照し視てよきあはれを知らて其獨を慎むを明德の鏡と  
此鏡は天道さるより誰もあはれとあはれども磨きさへてこそ若かり  
時ある經学者の教小聞しと狐の話つて大学の蹄小けて風諫せしは向ひ  
人弱年やあはれも身のあはれとあはれり者もあはれりきりて無用の長舌  
まどかひひいひいふ小まらせとあはれりさて我が里あて狐を捕る術さあぐあ  
つた小手を懐小して捕る術ありてその術いふとあはれり春陽の頃つりし雪も  
昼の内ハ軟るるやあはれ夜あはれ狐の徘徊する所へ麥を春杵を雪中へさへ入てニッ  
もニッもまどかひの穴を作りおけ夜小入りて此穴も凍りて岩の穴のやうなるなり  
さてくまは好く油滾るるをちりちりまきりの穴の中へ入るかくさて夜あはれ人静り

とありあつてかく為人のあつたこと己が邪智をたのめ終つて身を亡るは  
怒も賊怒も怒はれども身を亡る番餌之至善人の路小千金を視室小美人と  
對して心安小動さる止ることを知りて定るるあはれかた人の胸小明  
鏡ありて善悪を照し視てよきあはれを知らて其獨を慎むを明德の鏡と  
此鏡は天道さるより誰もあはれとあはれども磨きさへてこそ若かり  
時ある經学者の教小聞しと狐の話つて大学の蹄小けて風諫せしは向ひ  
人弱年やあはれも身のあはれとあはれり者もあはれりきりて無用の長舌  
まどかひひいひいふ小まらせとあはれりさて我が里あて狐を捕る術さあぐあ  
つた小手を懐小して捕る術ありてその術いふとあはれり春陽の頃つりし雪も  
昼の内ハ軟るるやあはれ夜あはれ狐の徘徊する所へ麥を春杵を雪中へさへ入てニッ  
もニッもまどかひの穴を作りおけ夜小入りて此穴も凍りて岩の穴のやうなるなり  
さてくまは好く油滾るるをちりちりまきりの穴の中へ入るかくさて夜あはれ人静り



ころ狐らふきうりちうーおきてるを喰ひ尽し捕らうとせむるものをつひつてゆんを  
 くらんとし身をまひ倒らりて穴入りしをまきつるものをつひつてゆんを  
 小尾のまきりづる程小作りまらけり穴のまき再びりづるす叶らば雪ハ深夜小  
 ちかひてまきくころりうまきちかひ穴をまきつるものをつひつてゆんを  
 終中性を勞らも捕入んとせりーのこまをまき水をつまきうりてあふ入る  
 ありり雪の穴のまきバをやハ水も漏れ狐ハ尾を振りて水小すしむ入ハ切り小  
 ありてくま将小死せんとき時くまらぬ尻をひるを避る狐尾を揺るるをて溺死こ  
 るを知り尾を採り大根を抜ぐてく一狐を得る穴ニツも三ツも作りかくゆきを  
 上り時ハ二足も三足も狐を引抜るあり之ハ凍りて岩のやうなる雪の穴のまき  
 土の穴ハくまを得のりまき自在をりて逃さるべしまき雪国小くまらるるまき  
 雪のついでふあせり

○ 鴈の代見立

我国雪盛なる時ハ鳥のどの食まきまきの一点もなきゆゑ冬ハ山野の鳥も掃  
 春ふりり雪降りせり頃諸鳥をるる二月ふりりても野山一面の雪の中  
 清水のまき水气温なるゆゑ雪のまき消る処もありこま水鳥の下る処  
 雁こまをるるまき二三羽らふきをて己まき求食まき糞をのりて喰ある処の  
 目とハ狸言ふこまを雁の代見立とハ雁のかくまら友鳥を集ひまきりて  
 かまらも求食せんとして之朋友小信ある人も耻まきゆらあるを心まき徒ら  
 をまきあり代見立の糞あまきまら種々の術を尽し雁のくまをまら  
 捕ふ雁もまきくまらこまをまらゆ人小あせとて糞小土をうけりて  
 かくて代見立ありくまら食らりて処ハふん小土をうけらるるまき  
 智ある人小あらる人まきこまらるるも知りてゆらまき糞小土をうけらるるまき  
 其辺りの矢頃まき処ハ人の入るべき程小挽をまきせらるるゆらるるものを雪小て作り後  
 小入り口をつけ内ハ洞小なり雁のまらべき方小穴をつててこのまきまらるるまき  
 雁ハ不時



ありあけのふりしるべし 雁を足さばらの穴より 銃炮の銃口をひきくさくさかきもるを里言  
ふゆきんぼうとのふ雪堂の 庭あり 雁の居る処を替つる夕暮夜半曉の  
人此時をもちて種くのエを冬して挿ふ我國雪の為ふさめぐの難美はわらう  
前ふりくるごとくも雪の重宝もあり 第一大小雪舟の便利縮の製  
作○雪堂○田舎芝居の舞臺杖敷花道も雪で作る○辻賣の居る処賣  
物の臺架も雪で作る是を里言ふさうやとのふ○歎符進鳥○積雪家を  
埋め却て寒威を禦ぐ○夏も山間の雪を以て奥鳥の肉を擁包かば敗餘を  
○雪水江河の源を養ふるを此外詳ふら猶あるは是をわらば天地の万物拾  
て置のハわらうらば捨て置ハ人悪のこ

○天の網

おとろ人悪をまて天罰漏るる奥の網ふらさざるごとくもるゆきんぼうをた  
とて天の網といふなり 新傳より三里上りて赤塚村といふあり山のともうぐふ

凹をすくありらふ杖をそと細糸の網をとりて鳥をくさくさを里言ふ赤塚  
の天の網といふ此村小窪ありゆき水鳥窪を慕ひくきり山の凹を掘きりゆ  
らむ天の網いふ大低ハ鷄といふ鴨小似る鳥之美味ゆき赤塚の冬至鳥  
とて遠く拾美を鷄鱗といふを省けらるんあぢくもといふ古哥ふもあま

○雁の総立

かよ七陸鳥ハ夜中盲となり水鳥ハ夜中眼明とて雁ハ夜中物をるるゆき  
もど明之他国ハあまを我國の雁ハわらハ昼ハ眠り夜ハ飛行く眠る時ハ人遠き  
処あま集り眠る此時ハ首をあげて四方をみるゆ雁二羽あり人こきを番鳥  
といふ求食もあま之飛小列をるる雁行とて兵書ふもいり人のあま処さ  
と居るふも位列をりて漫らるる求食時ハ衆あま遊ぶ時ハあまを雁中  
ふ一雁ありて野為衆さふ小随ふ大将と士卒とのごり人のきりり又ハわらきを  
ふさばらのわん鳥羽とてきをるを餘のとりこきをきりり求食ともゆきんぼうとも此羽



うまきをさてあやしくを幾羽も亂て飛あがりま列をゆく夫も里言ふことを雁の  
總立との雁の備ある事軍陣の如し餘の鳥もあきす之他国の雁もあきると  
田舎人の中珍しくと都會の人の話柄なり

○沽海川の氷の歩り

あづま川源ハ信越の境より北越後の内三十四里を流して千曲川ハ伴ハ此海  
入る此川越後の頸城の奥沼三嶋古志の四郡を流るゆゑ四府見の文字  
あきんうとあひいし不憐す之古書ハ沽海又新浮海とも見えたり此川屈り曲り  
廣狹言ハ尽すべからざる一面ハ氷り閑てその上ハ雪つゆりする所平地のごと  
まど急流岩ハ激しく水勢絶急なるハ雪もつゆりあはるる浪をみる処もあり  
渡口なるハ斧あて氷を碎きてこせども終ハ氷厚くありて力かよびたく船ハ陸  
氷在りて人ハ氷の上を歩ることを里言ふなりこの我國の裡言ふを  
物の凍るを〇ざい〇まゐる〇らてまどゆり<sub>古言ハ此川の氷り正月のともる二月のちど</sub>

ゆふの雪ハ陽氣を得て自然と裂て流る大なるハ七八間種々の形をとり大小ハ  
とととと川の廣き所と狭き処とふあふり且ハ裂てあて夕ふるをみるか  
あはれ一日あひハ一昼夜をうきりて三十四里の氷をみてけりまて北海ハ  
づつそのひびき千雷のごとく山も震ふなり此日川ハちた村ハ懐き居て外ハ  
いづるもさし他所の者ハ沽海川の氷見とて花見のやうハ酒肴をうづさし岸  
ハ彩進毛氈のどくまてこまをみる大小幾万の氷片氷晶の盤石のごとく  
のやうなる浪ハ漂ひあはるる目ざめしき莊觀なり氷を觀て樂ともる事暖國ハ  
さしふあはるる此川ハさしべつてまどゆり奇談あり次の巻ハらふべし

北越雪譜初編卷之中終





